

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

博士と狂人

2018年 / イギリス・アイルランド・フランス・アイスランド映画
配給：ポニーキャニオン / 124分

2020 (令和2) 年 10月 25日 鑑賞 シネ・リーブル梅田

Data

監督：P・B・シェムラン

脚本：トッド・コマーニキ/P・B・シェムラン

原作：サイモン・ウェンチェスター
『博士と狂人 世界最高の辞書 OED の誕生秘話』(ハヤカワ・ノンフィクション文庫)

出演：メル・ギブソン/ショーン・ベン/ナタリー・ドーマー/エディ・マーサン/ジェニファ・イーリー/ジェレミー・アーヴァイン/デヴィッド・オハ

👁️👁️ みどころ

メル・ギブソンとショーン・ペン。ハリウッドの二大俳優がはじめて共演！すると、どちらが博士役？どちらが狂人役？

辞典編纂の物語は石井裕也監督の『舟を編む』（13年）で経験済みだが、辞典づくりを巡る人生ドラマだけで2時間持たせるのは至難の業だった。しかし、博士と狂人が50年近く共同し、延べ70年をかけて完成させたオックスフォード英語大辞典を巡る人生ドラマなら・・・。

まずは、ショーン・ペンの狂人ぶりに注目！彼はなぜ精神病院に？次に博士の博識ぶりに注目！

しかし、本作ではそれ以上に、2人の男の友情と信頼、そして夫を奪われた人妻と狂人との間の憎しみと赦し、そして愛の物語がすごい。

そんな大きなストーリーを20年もかけて完成させたメル・ギブソンの熱意に拍手！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 二大俳優が初共演！どちらが博士役？どちらが狂人役？ ■□■

1956年生まれのメル・ギブソンと1960年生まれのショーン・ペンという、ハリウッドの二大俳優が初共演！原題が『THE PROFESSOR AND THE MADMAN』なら、邦題も同じ『博士と狂人』だが、どちらが博士役を、どちらが狂人役を？

本作は1998年に刊行されるや全米で大反響を呼んだベストセラー・ノンフィクションにほれ込んだメル・ギブソンがすぐに映画化に名乗りをあげ、構想20年を経てやっと完成させたもの。70年もの歳月を要したオックスフォード英語大辞典の完成ほどではないが、撮影日と予算のオーバー等のトラブルで裁判まで経た本作の完成には、全身全霊を懸けたメル・ギブソンの執念が感じられる。

冒頭、暗い画面の中に登場するのは、1872年にロンドンで開かれた法廷シークエンス。アメリカ人の軍医で元大尉のウィリアム・チェスター・マイナー（ショーン・ペン）は、南北戦争の過酷な戦争体験で心を病み、幻覚を見るようになっていた中、ある日、人違いによって一人の男を射殺してしまったらしい。その妻イライザ（ナタリー・ドーマー）が傍聴席で見守る中、言い渡された判決は「心の病により無罪」。マイナーはブロードムーア刑事犯精神病院に拘禁されることに。

続くシークエンスは、独学で勉強しフランス語、イタリア語、ドイツ語、ギリシャ語、ラテン語等を会得している男、ジェームズ・マレー（メル・ギブソン）がオックスフォード大学出版局に呼び出され、オックスフォード大辞典の新たな編纂責任者として適切かどうかの審査を受けているもの。博士号を持たないマレーに理事会は懐疑的だが、ただ一人、フレデリック（フレディ）・ジェームズ・ファーニヴァル（スティーヴ・クーガン）だけは、叩き上げ男・マレーの型破りな発想こそ膨大な辞典の編纂作業に不可欠だと主張。その結果、新たな編纂責任者に任命されたマレーは、学者や専門家でなく“英語を話す人々”に広く力を借りることを思いつき、必要な言葉を探し単語と用例をカードに書いて郵送してもらうというアイデアを駆使して世界最高峰の辞典作りの壮大な冒険を始めることに。

ここまで書けば、マイナー役がショーン・ペン、マレー役がメル・ギブソンになることは明らかだろう。

■□■辞典作りとは？「編纂」とは？VS『舟を編む』■□■

辞典作りをテーマにした邦画では、三浦しをんの原作を石井裕也監督が映画化した『舟を編む』（13年）（『シネマルーム 30』未掲載）が有名。しかし、辞典作りにつつまわる人間ドラマだけで2時間持たせるのはしんどかったようで、同作の私の評価は星3つだった。辞典作りの大変さがはじめて映画になった同作では、「恋」という言葉を巡る「語釈執筆」が面白かったが、本作前半も前述のマレーの方針に沿って、マレーとそのチームが懸命にアルファベットのAから順番に編纂作業を始める姿が描かれる。本作のパンフレットには飯間浩明氏（国語辞典編纂者）の「辞書はこうして作られる」があるので参考になるが、はっきり言って、本作後半からクライマックスにかけて盛り上がってくる感動を味わうには、この「辞典作りのテクニック」はあまり関係がない。また、マレーらが「Approve」等を一例としてスクリーン上で展開される編纂作業は、日本人にはほとんど理解できないものだ。他方、本作は原題も邦題も『博士と狂人』だが、チラシにもパンフレットにも「孤高の学者と、呪われた殺人犯。世界最大の英語辞典誕生に隠された、真実の物語。」と書かれている。さて、その意味は？

本作中盤は、ブロードムーア刑事犯精神病院に入れられているマイナーを巡るあるエピソードが描かれた後、マイナーを悩ます幻覚の治療法として、病室に絵画道具や本など、マイナーの愛用品が運び込まれるシークエンスになる。そして、クリスマスプレゼントとして看守が差し入れた一冊の中に入っていたマレーからの「声明文」をマイナーが読んだ

ことによって、大きな転機が訪れる。

これによって、もともと本の虫だったマイナーは、引用文集めの作業に没頭し、引用文を記入した1000枚ものカードをマレーに送ったから、それを読んだマレーは大喜び。長い間、アルファベットの「A」の段階で留まっていた編纂作業は、マイナーの登場によって一気に加速することに。そしてまた、互いの距離は遠くとも、博士と狂人の間には強い友情と信頼が一気に！

■□■憎しみの解消は？援助の受入れは？二人のご対面は？■□■

去る10月23日には大阪梅田にあるヘップファイブ10階から飛び降り自殺した17歳の男子高校生の下敷きになった19歳の女子大学生が死亡するという惨事が発生した。自殺するのはカラスの勝手だが、たまたまその下敷きになって巻き添えくった女子学生は悲劇というほかない。雷や工事現場からの落下物ならともかく、まさか空から生身の人間の肉体が降ってこようとは……。それと同じで、本作冒頭、マイナーの心の病によって夫が射殺され、未亡人になってしまったイライザも、突然の悲劇によってそれまでの幸せな人生が一気に失われてしまうことに。内職だけでは多くの子供たちを食べさせることもままならず、苦しい生活を強いられたイライザは、ひたすらマイナーを恨み、マイナーの援助などまっぴらごめん、としてきたが、マイナーと面会した上で彼の援助を受けるかどうかを決めることに。そこで登場するシーンが、中盤の山場となる二人のご対面だが、さて、その結末は？

他方、第一巻を完成させたマレーは、誰よりも早くその1冊を届けようとマイナーを訪れるが、なんと彼がいたのはブロードムア精神病院だったからビックリ！ここではじめて実現した、博士と狂人の“ご対面”の結末は？

■□■事態は一変！最悪の事態に！巻き返しは？■□■

オックスフォード英語大辞典の第1巻が完成し、マレーには博士号が授与されたから、万々歳！しかし、その内容の不備をウィーン大学やフィガロ紙が指摘したことで、マレー追放の動きが起きたからヤバイ。また、リチャード・ブレイン院長（スティーヴン・ディレイン）による、マイナーへの非人道的な治療の報道が流れる中、辞典の編纂にマイナーという殺人犯が関わっていることが報じられたから、事態はさらにヤバイ。前者については、マレーの最大の支持者であったフレディが辞任することによってマレーの辞任は免れたが、後者については、フレディもおらず、世間体ばかり気にする理事会の結論は目に見えていた。しかし、そこに突如登場したのがマレーの妻エイダ（ジェニファー・イーリー）。彼女の熱弁を聞くと、理事会の流れは一変し、マレーは再び辞任を免れることに。

最悪の事態を免れ、マレーが最悪の事態から巻き返せたのは幸いだが、その間、マイナーの治療は、また、マイナーの編纂作業への協力は？

■□■赦しから愛へ。その可否は？その受け止めは？■□■

前日に観た、河瀬直美監督の『朝が来た』では、14歳のひかりがいきなり妊娠。「子供

が子供を産んでどうするの？」という母親の悲痛な叫びの中、私には全然納得できないストーリーが展開していったので、いい加減ウンザリ。しかし、本作の中盤から後半にかけては、いきなり夫の命を奪われ、あれほど憎しみでいっぱいだったイライザが、はじめてマイナーを赦した後、マイナーから言葉を学ぶことを通して、面会の度にマイナーに対する愛が芽生えていくストーリーが展開されるので、それに注目！その女ゴコロの微妙さには私も少し戸惑ったが、もっと大きく戸惑ったのはマイナー本人。もちろん、イライザからの愛はうれしいが、誠実なマイナーが「それは彼女の夫を二度殺すことになる」、と解釈し、自分を責めたのもうなずける。そして、アカデミー主演男優賞を二度も受賞した名優ショーン・ペンが新たに生まれたそんな苦しみの中、自分の性器を切り落とすという凶行に走るマイナーの姿を鬼気迫る迫力で演じていく。

もちろん、こんな肉体的、精神的状況下、マイナーが編纂作業に協力できなくなっていたのは仕方ない。また、そんな状況下、ブレイン院長によるマイナーの治療がますます非人道的なものになっていったのも当然だ。今や、人目を憚ることなくマイナーへの面会を求めるイライザに対しても、院長はハッキリと面会拒絶！マイナーの実情をもっとよく知り、今やマイナーの気持ちとイライザの気持ちに強く寄り添うまでになっていた看守のマンシー（エディ・マーサン）も、院長の命令には従わざるを得ない。何とか面会を果たしたマレーが見たマイナーの姿は、院長の治療によって変わり果てたもので、このままでは余命数ヶ月？さあ、心の友であり、仕事上のパートナーでもあるマイナーを救うために、マレーは今、何ができるの？何をするの？

■□■内務大臣チャーチルの存在感に注目！■□■

7年8ヶ月にわたった安倍一強長期政権に代わって、菅新政権が登場したのは9月16日。以降、叩き上げの政治家、菅義偉のリーダーシップによるスピード感ある改革が始まっているが、本作ラストには、短い出番ながら時の内務大臣、ウィンストン・チャーチルが登場し、お見事なリーダーシップを発揮するので、それに注目！

オックスフォード英語大辞典の編纂作業は国民的ニュースだが、それはあくまで長期的なもの。内務大臣ともなれば日常忙しいのは当然だし、マレーがフレディと共に内務大臣室を訪れた今は、折悪しく突発事件対応のため、内務大臣室はごった返していた。こんな中で、最後の非常手段としてフレディとマレーが選択した、内務大臣にマイナーの釈放を求めるなど論外だ。スクリーン上を見ている観客は誰もがそう思うし、「少しだけ時間を取って下さい」と取り次いでもらったものの、その返答が「今はダメだ！」だったのは当然だ。ところが、そこで、フレディから「今日は強気で行け」とアドバイスされていたマレーが取った非常手段は、大声で直接チャーチル大臣に呼びかけるもの。いくら何でもこれは礼を失するばかりか、内務大臣室の秩序を乱す違法行為であることは明白だが、後に首相として英国をナチス・ドイツから救ったチャーチルが、そこで見せた行動と決断とは？

マレーの説明を手短かに聞き、一瞬に論点を理解した彼の決断は「釈放は無理だが、その

代わりに国外退去を命ずる」というものだった。なるほど、なるほど、これはすごい。その後は大団円に向かって終結していただけど、前日に観た『朝が来る』の結末とは大違いの、本作のダイナミックなストーリー構成に脱帽。メル・ギブソン監督の『パッション』(04年)、『シネマルーム 4』261頁)は賛否両論真つ二つに分かれたが、私は大好きな映画。そんな彼の20年の構想が、本作で実現できたことに拍手!

2020(令和2)年10月28日記